

に培養した菌を土壌に均一に混合した後、所定量の各供試化合物を注入し、24時間後に 0~5 cm 間の各層の土壌をとり出し、前と同様、後培養により菌の発育を調査した。これらいずれの場合にも、黒ぼく、壤土の場合は特に効力が小であり、また EPEM は EMP に比して効力が大であった。以上から推察すると、黒ぼく、壤土の

場合は砂壤土に比較して約 2 倍の薬量を必要とし、赤土の場合は等量ないしそれ以下で同等の効果が期待せられる。また、堆肥などの有機質の多少は、水銀剤の効力を左右する大きな要因と考えられるので、使用する際には以上の条件を考慮しながら、それぞれの場合に最も適した薬量を定めることが必要と思われる。

水銀剤散布が水稻のネグサレにおよぼす影響（予報）

奈 須 田 和 彦

（福井県立農事試験場）

水稻に水銀剤を散布した場合にネグサレがどうなるかについて知ろうとし、精密苗代で育苗した31品種をえらび、予めコンクリートポット（60×60×30cm）当り50grの澱粉を加用してネグサレが出やすいようにし、1株2本、3点植えとした。活着後3回にわたりセレサガ石灰25を10a当り5kg位散布した。散布2週間後掘取つて水洗し、馬場氏の方法に準じてネグサレ状態を調査した。その結果、Hg剤によつてネグサレにおよぼす影響に強弱がめられたが、外国稲、日本稲間では一定の傾向

がみられなかつた。

またマンリョウの茎葉部をソイルシン乳剤1000倍液に浸漬して発根力をめたところ、Hg剤区は発根がやゝよい傾向がめられた。

これらについては品種、生育時期、処理時期等によつて異なることが考えられるが、Hg剤処理はネグサレ、発根力に対して何らかの影響を与えるものと思われる。さらに追試して別の機会に報告したい。

深耕多肥栽培と病害発生との関係（予報）

今 村 和 夫 ・ 宮 松 一 夫

（福井県立農事試験場）

福井県において本年よりトラクター深耕による水稻生産の増大化が始められたので、それにとまなう病害発生を一部追究した。

試験区構成 供試品種はマンリョウ（中生）、区制は1区15m²で、普通耕、深耕、深耕全層施肥に各々標肥、多肥（25%増）をもうけ6処理2連制で行なつた。

調査結果 〔ホイモチ病〕発病が少ないため耕深差は明らかでないが、多肥は標肥に比べいづれも多かつた。

〔イネシラハガレ病〕深耕すれば発病は少ないが、深耕全層施肥の多肥は発病が多い。施肥量との関係では耕深に関係なく多肥は多かつた。

この結果、肥料の吸収に影響されることは明らかで、植物体の N・P・K 含有率について検討すれば次の傾向

がうかがわれる。Nについては、成熟期の含有率の多少に差がみられ、とくに幼穂形成期から成熟期にかけてのN含有増減率は、発病の多い普通耕、深耕全層施肥の多肥に高くあらわれている。なお幼穂形成期の含有率では傾向はめられない。P・Kについては一定の傾向はみられないが、成熟過程において発病の少ない深耕では含有増減率が高い傾向にある。結局成熟過程でのN吸収の多少が発病にかなり関与していることがうかがわれた。

〔イネモンガレ病〕菌核形成株および落下量の調査を行なつたが耕深差はほとんどない。しかし、施肥量については、多肥は標肥に比べて多かつた。菌核落下量でも同様な傾向がみられたが、とくに菌核形成株と茎数の多い多肥では、菌核落下量が多くみられた。